

「フィールドワークを通じた生命科学実験室の生態に関する研究」

成果報告

日比野愛子（京都大学大学院人間・環境学研究科）

柿内賢信記念賞奨励賞を受け、生命科学実験室を対象としたフィールド研究を進めてきました。奨励賞を励みに、**challenging** なテーマに新たに取り組むことができました。これをスタートアップとして、今後も同テーマの研究活動を展開していく所存です。助成をいただいた財団法人倶進会様および日本科学技術社会論学会様に改めて御礼申し上げます。以下、2008年11月時点での成果について報告致します。

<成果概要>

本研究では、国内の研究型大学院における生命科学（ナノバイオロジー）実験室に協力を仰ぎ、科学の活動がどのように実践されているかを調査してきた。切り口としたのは、実験室における「先端的デバイス」である。より具体的には、協力実験室が生命科学分野で初期に導入した AFM（Atomic Force Microscope；原子間力顕微鏡）に着目し、AFM をめぐる実験室内外の人・モノのネットワークの現状、ならびに、そのネットワークの成立経緯を調査した。

i) 協力実験室における実験活動の観察を通じて、先端的デバイスを用いて具体的にどのような生命科学の研究が実践されるのかを記録してきた。ii) 協力実験室のラボセミナー、関連テーマの研究会（SPM 研究部会）への参加・観察を通じて、生命科学分野における現状でのデバイスの位置づけや機能を調査してきた。iii) 延べ 19 名の国内外研究者へのインタビューを行い、現在トランスクリプトを作成している。インタビュー対象者には、協力実験室の成員、デバイスの開発に関わる企業関係者、工学的立場からデバイス研究を行っている研究者、海外の生命科学研究者、などが含まれている。聞き取り調査により、協力実験室／生命科学分野におけるデバイス導入の経緯や、活用にあたっての視座・戦略を把握することができた。

<発表予定>

本研究は、科学研究費「科学研究のリサーチ・パス分析-そのダイナミズムとイノベーションの質的調査研究」（基盤 B）と協働しており、本研究の調査結果の第一報は、上記プロジェクトの 2008 年度報告書において発表する予定である。学会発表としては、2009 年度に開催される日本グループ・ダイナミクス学会大会、科学技術社会論学会年次研究大会で報告する予定である。また、国内外の、科学技術社会論、社会心理学関連の学術雑誌への投稿も視野に入れている。